

『羅生門』にみるジェロントフォビア (gerontophobia) の系譜¹

倉田 容子

一、問題設定

芥川龍之介『羅生門』（『帝国文学』一九一五・一一）²に登場する老婆は、日本近代文学史上、おそらく最も有名で、最もおぞましい老婆像である。老婆は、「死骸」の臭気が充溢する場で、「死骸」の中に蹲りながら、「死骸」と向き合う形で登場し、「肉食鳥」「鴉」「墓」といったネガティブな比喩表現によって造形されている。この老婆像は、従来の研究史において、下人の心理を中心とするストーリーとの整合性において意味づけられてきた。しかしここでは、むしろその整合性を脱自然化すること、すなわち妖怪や魔物を連想させるネガティブな視覚的・聴覚的表現と、老婆に対する下人の憎悪や侮蔑といった感情、さらに下人の老婆に対する加害行為という三つの要素を結びつける暴力的なレトリックの回路を、同時代的なインターテクスチュアリティの観点から解体し、テキストに潜むジェロントフォビア (gerontophobia) を明らかにすることを試みたい。

ジェロントフォビアとは、高齢者に対する根拠のない恐れや憎悪を意味する心理学・精神医学用語であり、一般に「老年恐怖症」「老人嫌悪」などと訳される。エイジズムという言葉が人口に膾炙した今日ではあまり使われなくなった用語だが、アードマン・B・パルモアはジェロントフォビアをエイジズムの一例と位置づけ、「正常な機能の妨げとなるような極度の、神経症的な不安」³と定義している。本発表では、『羅生門』における老婆をめぐる語りには、同時代的なジェロントフォビアが反映され、また同時にテキストそれ自体が〈老いた女〉に対する一定のまなざしを再生産していることを論証する。

二、『羅生門』の老婆表象の特異性

まず、『羅生門』の典拠とされる『今昔物語集』第二九第一八「羅生門登上層見死人盗人語」および影響関係が指摘される博文館『日本昔噺』シリーズにおける老婆像との比較から、『羅生門』の老婆表象の特異性について検証する。

『今昔物語集』において老婆の容貌に関する記述は「年極ク老タル」と「白髪白キ」のみであり、「此レハ

若シ鬼ニヤ有ラム」という「盗人」の恐れも、老婆の容貌に由来するものではなく、「死人ノ髪ヲカナグリ抜き取ル」という行為の異常性によるものである⁴。また、『日本昔噺』シリーズにおいては、鬼や鬼婆の化身である老婆は当初「品の好いお婆さん」、かつての「乳母」、「人の好きょうな老婆さん」として登場する⁵。ここでは老婆の姿は、それ自体が恐怖の対象なのではなく、むしろ安心感や懐かしさを喚起するがゆえに人を欺くのに適した姿と見なされているように思われる。

すなわち、これらのプレテキストと『羅生門』の老婆表象の差異として、〈老いた女〉の容貌それ自体に対する極端にネガティブな評価を指摘することができる。「屍骸」との親和性に加え、「皺で、殆、鼻と一つになつた唇」や「尖つた喉仏」といった描写、そして「肉食鳥」などの比喩を用いて語られる老婆像は、鬼や鬼婆といった怪異的な存在ではないにもかかわらず、徹底的に異物化されている。ここでは顔の色や皺といった身体的な〈古い〉の有徴性それ自体が、怪異性へと置換されているのである。

三、異物としての老婆像

〈老いた女〉の容貌に対するこのようなネガティブなまなざしは、必ずしも『羅生門』に独自のものではない。異物としての老婆像を『羅生門』以前の日本近代文学に探せば、一九〇八年に辿り着く。一九〇八年は、四月一三日から七月一九日まで「読売新聞」紙上で連載された田山花袋『生』を筆頭に、徳田秋聲『二老婆』（『中央公論』一九〇八・四）、岩野泡鳴『老婆』（『趣味』一九〇八・五）と、計三つの“老婆もの”が発表された、老婆の表象史におけるエポック・メイキング的な年であった。これらの三作には、それ以前の小説テキストに見られた典型的な老婆表象とは異なる、〈老いた女〉の身体性に対する嫌悪に満ちたまなざし、および、その再現＝表象のレトリックを見ることが出来る。

一般に日本近代文学は「青年の文学」などと言われることもあるように、中年女性を主人公に据えた小説は決して多くない。しかし脇役として、物語の片隅

には常に様々な階級の中老年女性の姿があった。その断片的な表象を追っていくと、文学ジャンルの枠を超えていくつかのステレオタイプが存在することに気付かされる。なかでも明治期の小説において最も典型的なのは、〈乳母〉と〈老母〉である。

中老年の乳母が小説に頻出するのは一八九〇年代くらいまでで、彼女たちは「忠」をその第一義的な属性としている。最も典型的な乳母像として主家が没落した後も忠誠心を抱き続け、主人公の「お嬢様」に仕える乳母の例を探せば、例えば尾崎紅葉『南無阿弥陀仏』（「百花園」一八八九・五・一〇～六・二〇）、樋口一葉『闇夜』（「文学界」一八九四・七～一一）、三宅花圃『八重櫻』（「文藝倶楽部」一八九六・五）北田薄氷『乳母』（「文藝倶楽部」一八九六・五）などがある。これらはいずれも、近代的雇用契約に移行する以前の、封建的な階級意識の色濃い女性家事使用人の位相を垣間見せるものである。

一方、老母もまた、二葉亭四迷『浮雲』（金港堂、一八八七・六、一八八八・二、「都の花」一八八九・七～八）や森鷗外『舞姫』（「国民之友」一八九〇・一）をはじめとして、一八九〇年代くらいまでは「孝」の対象としての老母像が目立つ。『浮雲』や『舞姫』では老母は物語に直接姿を現すことはなく、とくに前者においては「写真」という形で象徴化されて語られている。

まとめると、乳母にせよ老母にせよ、一八九〇年代くらいまでの小説において中老年女性が語られる際には、フレームワークとして「忠」や「孝」の観念がある程度機能していた。ところが、「自然主義」の興隆に伴い、こうしたフレームワークが揺らぎはじめる。それを端的に示すのが、一九〇八年の一連の“老婆もの”である。花袋『生』における老母の身体性に注目すると、たとえば「蒲団は成たけ清潔にして、敷布は絶えず洗濯するやうにして置くが、死に近い病人には、床摺れの靡爛や長い間の汚れた皮膚の悪い臭気こそことなく纏はつて、吐く呼吸も健康者の鼻には夥しく不快に感ぜられる。従つて蠅が多い。打つても打つても煩さく其周囲に集つて来る」といった表現が見られる⁶。ここでは老母は、観念的な「孝」の対象である以上に、老いゆく身体を生々しくさらけ出す、不快な異物として語られている。

とくに注意したいのは、老母が「汚れた」「悪い臭気」「不快」といった否定語とともに語られている点である。岩野泡鳴『老婆』および徳田秋聲『二老婆』にも共通していることだが、これらのテキストにおいて老婆像は臭気や吐瀉物、汚れ物といった不快な表象と

もに造形されている。ジュリア・クリステヴァ⁷は、「人がおのれ自身となるために他人との相同性を図る手段としての模倣行為 (*le mimétisme*)」(20頁) すなわちラカンの「鏡像段階」以前の論理的にも時間的にも原初的な「棄却作用」(アブジェクション)として、「ある食物、汚物、屑、塵芥に対する嫌悪感。私の身を守る痙攣や嘔吐。汚穢、掃きだめ、不浄から私を引き離し、身をそむけさせるような反感や吐き気」(5頁)を挙げているが、そうした前-記号的な「アブジェクト」(おぞましきもの)を招き寄せるようにして、老婆イメージが形成されているのである。

『羅生門』の老婆表象、すなわち「屍骸」との親和性や、ネガティブな視覚的・聴覚的表現、「睨」の色や「皺」の表情までも詳述するミメシス性の高い描写には、これらの「自然主義」の“老婆もの”との連関性が認められる。芥川は『あの頃の自分の事』(「中央公論」一九一九・一)において、東京帝国大学在学中に久米正雄らとの議論のなかで「田山花袋氏が度々問題に上つた」とし、「我々は氏の小説を一貫して、月光と性慾とを除いては、何ものも発見する事は出来なかつた」と述べている。しかし、『羅生門』に見られる〈老いた女〉を醜悪で動物的な、死の世界の住人として捉えるまなざし、そしてその再現=表象のレトリックには、芥川が「冷笑」を伴いながらも受容した花袋らの「自然主義運動」と連続する二〇世紀初頭のジェンダー/エイジング規範をたしかに見ることができる。

四、老婆殺しの系譜

ここまで主にレトリックの観点から老婆表象の系譜を見てきたが、下人の「憎悪」が加害行為へと転化する心理的プロセスを明らかにするためには、もう一つ別の老婆像の系譜を見ていく必要がある。それは、内田魯庵によって翻訳されて以来多くの文学青年に愛読されたドストエフスキー『罪と罰』(巻之一=内田老鶴圃、一八九二・一一。巻之二=内田老鶴圃、一八九三・二。後に改訳し、巻之一・二を合わせて「前編」として丸善より一九一三年七月刊行)に見られるような、老婆殺しのプロットである。

『罪と罰』において老婆は「悉く出来損なつてる」と蔑まれつつ、同時に「自己が殺したのは人間ではなくて主義だ」としてラスコーリニコフ=〈若い男〉を支配する強大な権力をもった「主義」を投影され、殺さなければ彼のアイデンティティが損なわれるような不安の源として、まさにフォビアの対象すなわち「正常な機能の妨げとなるような極度の、神経症的な不

安」を呼び起こす存在として語られている⁸。

青年による老婆殺しのモチーフは日本では小説ジャンルの枠を超えて再生産されたが、なかでも正宗白鳥『老婆殺し』（「新小説」一九一八・一）はその殺害動機の振れまでもが踏襲されている点で注目される。『老婆殺し』の主人公藤田圓吉は、決りかけた縁談を息子の上司に譲られたことで、とある老婆に恨みを抱いている。しかし、彼の恨みの内実は縁談の破談にあるわけではない。「自堕落な生活を一変する所縁として女房を取る気になつて勇み立つてみた鼻先を、無残にも不思議な運のためにへし折られたのが忌々しかつたが、老婆こそその不思議な運の侍女のやうに思はれるのであつた」とあるように、藤田もラスコーリニコフ同様、彼を支配する「不思議な運」を老婆に投影し、根拠のない憎悪を燃やしている⁹。やがて藤田の内面世界では、「皷」によって特徴付けられる記憶の中の老婆に対する猟奇的な感情が高まり、「神経症的な不安」に苛まれるようになる。

このような老婆殺しの系譜を脇においてみたとき、次のような『羅生門』の語りもまた、一つの典型的な近代青年の語りとして浮かび上がってくる。

その髪の毛が、一本づゝ抜けるのに従つて、下人の心からは、恐怖が少しづゝ消えて行つた。さうして、それと同時に、この老婆に対するはげしい憎悪が、少しづゝ動いて来た。——いや、この老婆に対すると云つては、語弊があるかも知れない。寧ろ、あらゆる悪に対する反感が、一分毎に強さを増して来たのである。

語り手が「下人には、勿論、何故老婆が死人の髪の毛を抜くかわからなかつた。従つて、合理的には、それを善悪の何れに片づけてよいか知らなかつた」と留保をつけているように、老婆の行為と「あらゆる悪」の間には因果関係はない。このような下人の老婆に対する不可解な憎悪の暴発は、『罪と罰』や『老婆殺し』の展開と酷似している。

そもそも下人は、四五日前に「永年、使はれてゐた主人から、暇を出された」ために「行き所がなくて、途方にくれて」おり、「盗人になるより外に仕方がない」と云ふ事を、積極的に肯定する丈の、勇気が出ずにいた。このような下人自身の思考を含めた「あらゆる悪」を、下人は、偶然出会った一人の他者、すなわち（若い男）である下人に対して副次的なジェンダー／エイジング・カテゴリーに属する（老いた女）に投影したに過ぎない。下人の主観において「あらゆる

悪」の化身へと転化したこの老婆の存在により、「下人は、さっき迄自分が、盗人になる気でゐた事などは、とうに忘れてゐる」、すなわち自己の「悪」を否認した新たなアイデンティティを獲得する。そして、「悪」の象徴としての老婆を「狃ぢ倒した」ことにより、下人は「安らかな得意と満足」を得る。このとき老婆とは、下人にとって自己の影として構成された他者に他ならない。

このような下人のアイデンティティの闘争が孕む暴力性を覆い隠し、被害者の老婆こそがあたかも彼を負の世界へといざなうメフィストフェレスであるかのような印象を与えているのが、（老いた女）に対する極端にネガティブな感情を含んだ語りである。伊藤一郎「傀儡としての〈作者〉」（『芥川龍之介・第1号』洋々社、一九九一・四）が指摘するように、「初めて彼女が登場したところから、老婆に感情移入し同化するためには、読者はこの語りの仕組に乗り切れないほどの老人に対する同情心——老人は労わるべきであるという良俗——の強固な持ち主でなければならない」。この意味において、語り手は、老婆に加害する下人と共犯関係にあると言える。

五、〈他者〉としての老婆

以上、一九世紀末から二〇世紀初頭の老婆表象の系譜のなかに『羅生門』を位置づけることで、グロテスクな視覚的・聴覚的表現と、下人の心理、そして加害行為という三つの要素がテキストにおいて連結される回路に潜むジェロントフォビアを明らかにしてきた。

最後に、より大局的な歴史的文脈にこの読みを配置したい。渡邊拓「『羅生門』について」（『論樹』一九九四・九）は、大正初期の「個人主義」の流行に着目して『羅生門』の読者論を展開し、「こういう経済争覇戦（世界経済争覇戦—引用者注）のためには、自己管理をする主体、自己の心理を見つめる主体が必要とされた」「それは労働者よりもまずブルジョア自身に求められたものだったはずである」と指摘する。そして、「心理的個人を提示する芥川の作品は当時のこうしたブルジョアジーの要求にあるいは合致していると考えられる」と述べている。

『羅生門』が読者の「主体」形成の要求に応えるものであったとする指摘は、（老いた）（女性）の他者化という本発表の文脈に照らしても、大変興味深い。このような見方においては、『羅生門』における老婆をめぐる語りは、市民社会における排除の構造のアレゴリーとなる。「ブルジョワジー」の青年たちのアイデンティティ確立のプロセスにおいて、影として構成さ

れた他者、そのひとつが〈老いた〉〈女性〉という二重の副次性を帯びた「老婆」であった。

注

- 1 本発表は、拙稿「『羅生門』と一九世紀末～二〇世紀初頭の老婆表象——ジェロントフォビア（gerontophobia）の系譜」（『F-GENSジャーナル』二〇〇七・七）に基づくものである。
- 2 芥川龍之介のテキストの引用は『芥川龍之介全集』（岩波書店、一九九五・一一～一九九八・三）による。
- 3 アードマン・B・パルモア、鈴木研一訳『エイジズム——高齢者差別の実相と克服の展望』（明石書店、二〇〇二・九）81頁
- 4 引用は新日本古典文学大系『今昔物語集五』（一九九六・一、336頁）による。
- 5 引用は臨川書店の復刻版（一九七一・一〇）による。
- 6 引用は復刻版『定本 花袋全集』第一巻（臨川書店、一九九三・四、151 - 152頁）による。
- 7 ジュリア・クリステヴァ、枝川昌雄訳『恐怖の権力——〈アブジェクション〉試論』（法政大学出版局、一九八四・七、原著一九八〇）
- 8 引用は『内田魯庵全集』第一二巻（ゆまに書房、一九八四・四）による。
- 9 引用は『正宗白鳥全集』第七巻（福武書店、一九八四・五）による。

くらた ようこ／お茶の水女子大学大学院 人間文化研究科 国際日本学専攻
日本学術振興会 特別研究員 (21COE)